

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593307

研究課題名(和文)乳がん患者の語りにもみる手術後の苦痛の経時的変化と対処方法に関する研究

研究課題名(英文)A study on temporal change of pain and coping strategies after operation of breast cancer appeared in narratives,

研究代表者

城丸 瑞恵 (Shiromaru, Mizue)

札幌医科大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90300053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、手術後から回復期の全人的苦痛の様相とベネフィットファインディング(Benefit finding)について明らかにすることを目的とした。分析データはDIPEX Japan、J-POP VOICE、闘病記から得られた乳がん患者自身の語りである。テキストマイニングなどを用いて質的・量的に分析を行い、特に身体的苦痛の多様性と、病いを肯定的にとらえる背景について見出した。これらの結果は国内外の学会で発表を行った。また関連する学術雑誌において掲載予定である。

研究成果の概要(英文)：The aim of present study was to find out the characteristics of pain as a whole person perspective as well as benefit finding of illness in the recovery process after the surgery. Data used for analysis were narratives of individual patients with breast cancer obtained from websites, DIPEX-Japan and J-POP voice, and autobiographical illness narrative books written by patients. A mixed methods research was conducted with qualitative and quantitative analysis including text mining method. Variety of physical pain and background of positive attitudes toward illness were found out. We have presented a series of papers on this study in domestic and international academic conferences. We are now preparing a scientific paper to be published in an academic journal.

研究分野：看護学

キーワード：乳がん患者 全人的苦痛 ベネフィットファインディング 語り

1. 研究開始当初の背景

わが国において、乳がんは女性のがん罹患率では第1位であり、死亡率も毎年増加している。乳がんの治療方法の第一選択として手術療法があり、術式の工夫で手術部位の縮小化が進んでいる。しかし、手術後6ヶ月以内から乳房切除後疼痛症候群(Post Mastectomy Pain Syndrome)の発症など、手術後も疼痛を含めた苦痛が生じる可能性がある。このように、がん患者のQOLを低下させる最も大きな要因として「痛み」があり、身体的な痛みだけではなく心理的・社会的・スピリチュアルな苦痛を伴うことが予測できる。包括的に苦痛を緩和するためには早期から軽減する必要があり、可能な限り早く介入することによって、慢性疼痛の予防などにつながる。しかし、これまでのところ乳がん患者の手術後の苦痛と対処に関する経時的な変化と支援に関する研究は十分ではない。

2. 研究の目的

本研究は、手術をした乳がん患者の「患者自身の語り」から得られたテキストデータを質的・量的に分析して、手術後から回復期の全人的苦痛の様相を明らかにする。また支援方法の示唆を得る為に乳がんがもたらすベネフィットファインディング (Benefit Finding , 以下BF) について明らかにする。

3. 研究方法

研究期間：2012 (平成24)年4月～2017 (平成28)年3月

分析対象：乳がん患者による「闘病記」や

「DIPEX-Japan」「J-POP VOICE」のデータを分析対象とした。

分析方法：

本研究は、手術をした乳がん患者の経時的な苦痛の様相とコーピングおよびBFについてテキストデータを用いテキストマイニング手法などによって質的・量的に分析した。

4. 研究成果

1) 研究内容

当初の予定通り「闘病記」「DIPEX-Japan」「J-POP VOICE」のデータを収集して分析を行い、国内外の学会発表、また関連する学術雑誌に投稿した。以下はその一部である。

論文タイトル「ウェブサイトを用いた乳がん体験者の転移進行度による語りの比較テキストマイニング分析による話題の抽出」(雑誌論文 該当)

本稿では、乳がん体験者における苦痛の経時的変化を検討する基礎的資料になりうるウェブサイトを用いた転移進行度による乳がん体験者の語りの傾向を報告する。

ウェブサイト JPOP-VOICE と DIPEX Japan に収録された女性乳がん体験者のべ 49 人の語りを分析対象として、転移なし群、局所転移群、遠隔転移群に分類し、テキストマイニング手法を用いて、名詞の頻度分析を行った。その結果、「自分」、「先生」、「人」という単語が、語り全体において上位を占め、転移なし群、局所転移群、遠隔転移群のそれぞれの語りでも上位6番目以内に出現していた。これらより、「自分」である乳がん体験者にとって、「先生」に代表される専門家と、「人」に代表される非専門家が、どの転移進行度においても病いや生活を語る上で重要な話題となっていることが明らかになり、またどの転移進行度においても心理的成長を体験できることが示唆された。

上記のほかに本研究で明らかになった主な点は以下の通りである。

○乳がん患者の身体的苦痛の様相

日本国内で1972年から2012年の間に、乳がんと診断を受けた患者によって執筆された83冊のうち、本研究のテーマを分析するために22冊を合目的なサンプリング方法によって抽出した。探索的質的研究法を用い、【初期治療に至るまでの自覚症状】【検査に

伴う痛み】【手術後の耐え難い痛みと感覚異常】【術後 3 ヶ月以上継続する痛みと感覚異常】などが抽出された。これらの結果から多様な身体的苦痛への対処方法の構築が必要であることが示された（英文ジャーナルに投稿中）。

○乳がん患者の語りからみる病がもたらすベネフィットファインディング：

2000 年以降発行の乳がん闘病記のうちの 22 冊を対象にして乳がん体験による BF を表現する文脈を抽出・要約し、類似性に留意しながらサブカテゴリ・カテゴリを生成した。その結果、【他者に対する感謝の芽生え】、【がんによる益】、【平常がもたらす喜び】、【自己の成長の喜びと実感】、【自己の存在理由の意識化】、【わき上がる生への希望】、【他者への貢献の願い】の 7 カテゴリが抽出された。乳がん体験者には、以前から現前としていた日常性や人々との関係のすばらしさへの気づき、また、病いと向かい合おうする自己の力への気づき、多くの困難や自己否定されるような病いを体験した自分だからこそ存在してよいのだという自己肯定が生じていたことが明らかになった。（雑誌論文 該当）

○乳がん患者の化学療法に対する心情：

乳がん患者の援助方法を構築する第一段階として、抗がん剤に対する患者の思いについて闘病記を用いて明らかにすることを目的として、2010 年以降に乳がん患者によって執筆された闘病記 5 冊の語りをテキスト化した。その後「Text Mining Studio Ver4.1」によりテキストマイニングを実施した。単語である「抗がん剤」と形容詞の共起関係に着目した注目分析、またその単語がどのような文脈で用いられているか原文参照を行って、乳がん患者の抗がん剤に対する思いについて分析した。その結果、「抗がん剤」に共起する形容詞は「情けない」「歯がゆい」

「たまらない」であった。これらの単語が用いられている原文を参照すると、例えば「情けない」は、抗がん剤は脱毛などで辛い「ホルモン治療をしている時は - 略 - ちょっとしたことでイライラして、ムスメに当たったりしていた。そんな自分が歯がゆくて悔しくて、また泣けた。」のように抗がん剤とホルモン療法を比較した文脈の中で記載されていた。また「歯がゆい」は化学療法に対して「最終的に、断る勇気をもてなかった自分がかゆい」と記載されていた。「たまらない」は「抗がん剤を投与されて 1 週間ほど経った頃 - 略 - 頭が無性にカーッと熱くなり、かゆくて、かゆくてたまらなくなりました」と、身体症状への苦痛を表現していた。いずれも自分の力ではコントロールが難しい苦痛に対する感情が表出されていた。（学会発表 該当）

2) まとめ

本研究期間において乳がん患者の全人的苦痛の様相の一部が明らかになった。またがんを体験する人々が今を生きるための視点として病いによる肯定的変化に注目することの意義が示唆された。今後はこれらの分析をさらに進めて乳がん患者の支援モデルの構築に取り組むことが課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

仲田みぎわ、城丸瑞恵、佐藤幹代、門林道子、水谷郷美、本間真理、いとうたけひこ
（2016）乳がん体験者の闘病記にみる病い体験による肯定的変化、死の臨床、
vol.39No.1, 185-191 （査読有）

城丸瑞恵、水谷郷美、いとうたけひこ、門林道子、佐藤幹代、小平朋江、本間真理
（2013）「乳がん研究の動向」と「患者の語

り」のテキストマイニング活用例 , 看護研究, 46(5), 494-502.

水谷郷美, いとうたけひこ, 城丸瑞恵, 小平朋江, 佐藤幹代, 門林道子, 本間真理 (2013), 「ウェブサイトを用いた乳がん体験者の転移進行度による語りの比較 テキストマイニング分析による話題の抽出」: 札幌保健科学雑誌 2, 57~60. (査読有)

[学会発表](計6件)

Kadobayashi, M., Shiromaru, M., Nakada, M., Ito, T., Mizutani, S., Sato, M., Honma, M., and Kodaira, T. (2015, February), *Why do authors publish their own Tobyo-ki?: Focus on books written by breast cancer patients*. Poster session presented at the 18th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2015), Taipei, Taiwan.

Shiromaru, M., Mizutani, S., Ito, T., Nakada, M., Sato, M., Kadobayashi, M., Kodaira, T., Honma, M. (2015, February) *Narratives about chemotherapy in Tobyo-ki: From autobiographies written by women with breast cancer*.

Poster session presented at the 18th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2015), Taipei, Taiwan.

Sato, M., Kadobayashi, M., Shiromaru, M., Mizutani, S., Honma, M., Kodaira, T., Nakada, M., & Ito, T. (2014, February). *Characteristics of physical pains and psychological suffering described by breast cancer patients in their journals*. Poster session presented at the 17th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2014), Manila, Philippines. (Forum Proceedings, p. 52).

Shiromaru, M., Mizutani, S., Sato, M., Kadobayashi, M., Honma, M., Kodaira, T., Nakada, M., & Ito, T. (2014, February). *Positive changes due to disease experience noted in personal journals written by breast cancer patients*. Poster session presented at the 17th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2014), Manila, Philippines. (Forum Proceedings, p. 43).

Kadobayashi, M., Shiromaru, M., Sato, M., Honma, M., Nakada, M., & Ito, T. (2014, February). *CHARACTERISTICS OF TOBYO-KI WRITTEN BY BREAST CANCER PATIENTS AND MEANING OF WRITING FOR AUTHORS*. Poster session presented at the 17th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2014), Manila, Philippines. (Forum roceedings, p. 33).

Shiromaru, M., Ito, T., & Mizutani, S. (2013, February). *Emotional characteristics of stories of women who have experienced breast cancer depending on the presence or absence of metastases*. Poster session presented at the 16th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS 2013), Bangkok, Thailand.

[その他]

第34回日本看護科学学会学術集会
2014年11月29・30, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

患者の語り Web サイト・闘病記・手記: ナラティブ教材と患者体験学を展望して
いとうたけひこ, 小平 朋江, 城丸 瑞恵
仲田 みぎわ, 佐藤 幹代, 森田 夏実,
吉川 (和田) 恵美子, 水谷 郷美, 門林 道子

第 33 回日本看護科学学会学術集会
2013 年 12 月 6・7 日，大阪国際会議場（大
阪府大阪市）

看護データのテキストマイニングと近未来
服部兼敏，城丸瑞恵，大河原知嘉子，
西川まり子，猪下光，井田歩美，小平朋江，
水谷郷美，柴崎美紀

6．研究組織

(1)研究代表者

城丸瑞恵（SHIROMARU, Mizue）
札幌医科大学・保健医療学部・教授
研究者番号：90300053

(2)研究分担者

伊藤武彦（ITO, Takehiko）
和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号：60176344

本間真理（HONMA Mari）
札幌医科大学・医学部・助教
研究者番号：90423780

小平朋江（KODAIRA, Tomoe）
聖霊クリストファー大学・看護学部・
准教授
研究者番号：50259298

佐藤幹代（SATO, Mikiyo）
自治医科大学・看護学部・准教授
研究者番号：00328163

水谷郷美（MIZUTANI, Satomi）
順天堂大学・医療看護学部・助教
研究者番号：40621727

門林道子（Kadobayashi, Michiko）
日本女子大学・人間社会学部・研究員
研究者番号：70424299

仲田みぎわ（NAKADA, Migiwa）
札幌医科大学・保健医療学部・講師
研究者番号：50241386